KPMG 税理士法人
グローバルモビリティサービス

佐藤大知さん

逆算の考えで、未来をつかむ

↑神田 10 号館グローバルフロアにて

グローバル企業をクライアントに、税務のスペシャリストとしてコンサルティングを行う。日常的に英語を使う仕事だが、実は大学入学時は、まったく英語ができなかったそうだ。では、どのように英語を習得し、さらには米国税理士の資格を取得したのか。話を聞けば、そのカギは、挫折から得た「逆算の考え」にあった。

さとう　だいち

1994 年 7 月 5 日生まれ（大谷翔平と同日！）。埼玉県育ち。2012 年、浦和学院高校卒。専修大学経済学部在学中に米国オレゴン大学に長期交換留学。2016 年専修大学卒業後、KPMG 税理士法人に就職。

グローバル企業において国をまたいだ人の移動は頻繁に起こる。その際、国ごとの税制度の違いから、専門家のサポートが必要となる。

米国税理士の資格を持つ佐藤大知さんは、世界四大会計事務所の一つ、KPMG の日本法人で企業のコンサルタントに携わる。専門は国際人事税務。グローバル企業にとって不可欠な存在だ。

海外のクライアントや外国人スタッフとの打ち合わせはすべて英語。大学時代に身に付けた語学と社会人になって取得した米国税理士の資格が活きる。

そんな佐藤さんだが、実は大学入学時は全く英語ができなかったのだという。

サッカーをなくして、何も残らなかった

幼少期からサッカーを始め、小学校時代に所属したチームで全国２位に。中学時代はＪリーグクラブ大宮アルディージャの下部組織でプレー。高校はスポーツ推薦で強豪、浦和学院高校へ。

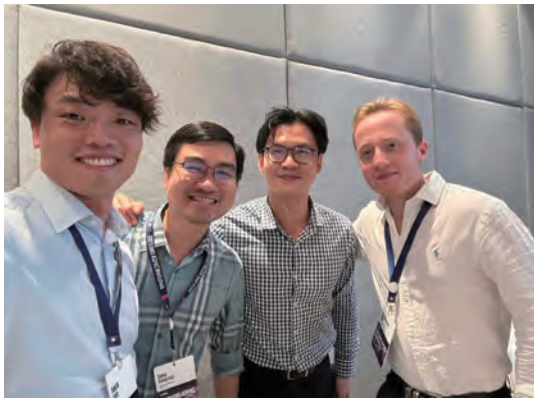
目標はプロ選手だった。しかし、高校時代にチームとしても個人としても満足のいく結果は出せず、道半ばで断念。

「今までの自分の人生をすべて否定したような思いでした。自分からサッカーを取ったら、何もなくなってしまったなと。何か新しいことにチャレンジしなければと思い、なんとなく英語を身に付けようと思いました」

英語を話せるようになれば、いい仕事に就けると考えた。指定校推薦で専修大学経済学部に進学を決めた。入学前から留学プログラムに関する資料を隅々まで読み込み、留学へ思いを馳せた。しかし入

↑サッカーに明け暮れていた小学校時代

↑米国オレゴン大学留学時、仲間と


↑職場にて、海外オフィスのメンバーと

学後、打ちのめされる。

「恥ずかしい話ですが、それまでサッカー一筋だったので、勉強の仕方がわかりませんでした。留学のための語学講座に参加しても、まったくついていけなくて、絶望しました」

戦略的かつがむしゃらに英語を習得

３年次に長期交換留学プログラムに参加するためには、応募期限の２年次の末までにTOEFLの基準を超えなければならない。中学レベルからのスタートで、「気の遠くなるような思い」だった。

それでも諦めなかったのは、「英語すら挫折したら何も残らない」「将来家庭を持ったときに経済的に安定していたい」という思いがあったからだ。

まずは大学１年の夏休みに、学外の留学プログラムを利用してフィリピンに１カ月間留学。そこで英語に慣れ、英語学習の足掛かりを作った。

その後、個人指導と独学で地道に勉強。交換留学の選考を通るために、英語だけでなく、学部の授業でも好成績を目指した。

そして、努力は報われる。３年次の春から10カ月間、長期交換留学生として米国オレゴン大学へ留学。最初の２カ月はホームステイをしながら語学学校で学び、その後、大学の寮に入り、正規授業科目を履修した。

しかし、留学は一つのスタートでしかなかった。

「留学して気づいたのは、留学しただけでは英語が喋れるようにはならないということ。こちらが何もしなければ、周りは話しかけてもきませんでした」

そこで行動に出る。オレゴン大学で行われていた日本語の授業。そこに駆け込み、自分が日本語を教える代わりに、英語を教えてくれる学生を探した。

１時間は日本語、１時間は英語で会話するというギブ＆テイクの個人レッスンを、毎日相手を替えて行った。一気に英語力は上がり、友人関係も広がった。

失敗から学んだ逆算の考え

10カ月の留学を終えて帰国。就職活動をして、KPMG税理士法人の内定を得た。

入社後は、働きながら米国税理士の資格を目指した。より専門性を高めたいと思ったからだ。

「何者でもない自分にコンプレックスを感じていました。資格は絶対に必要なものではなかったのですが、信用を得るためのきっかけになる。自分ができることを証明する意味でも、資格が欲しかったんです」

仕事を終えて帰宅した後、毎日２、３時間の勉強を続け、３年後に米国税理士の試験に合格した。

目標を達成するために、いま何が必要かを逆算して取り組む。その考えは、苦い挫折によって得たものだ。

「サッカーのプロを諦めたと決めたとき、涙が止まらなかった。自分は誰よりも努力をしていたはず。でも、自分が求めるレベルに届かなかった。それって、その努力の方向性ややり方が間違っていたということ。こうなりたいと思ったら、そのために何が必要かを逆算して取り組まなければ、結果は出ない。あのとき、それに気づきました」

いまでは家庭を築き、経済的に安定した生活を得ている。リモートワーク中心の育児と仕事を両立させたライフスタイルにも満足している。

「この幸せを大事にしたいです。そして、自分の幸せだけで終わりたくないとも思います。大学時代も、就職してからも、これまで周りに支えられてきたので、これからは自分が人に何かを残したい。仕事においては、アップデートさせて下の代に引き継いでいきたいという思いがあります」

そんな目標も口にする。そのためにいま何をするか。その逆算、すでに頭の中でできているのかも。